

三瓶自然館野外観察コーナーで見られた鳥類 －2022年度の調査記録－

星野由美子*

A Record of Wild Bird Observed from Birdwatching Room in the Shimane Nature Museum of Mt.Sanbe - Survey record for 2022 -

Yumiko HOSHINO*

Keywords : avifauna, breeding season, bathing area

キーワード：鳥類相, 繁殖期, 水場

1. はじめに

島根県立三瓶自然館では、野外の自然を展示の一部として位置づけている。そのひとつとして、本館1・2階の一角に「野外観察コーナー」を設け、人工的に配した巨石の上に、適度な量の水を流し、野鳥のための水浴びや水飲みの場（以下、水場）としている。この水場には1991年の開館当初から多くの野鳥が水浴びに訪れており、出現した鳥類については、2000～2005年（第Ⅰ期）および2010～2015年（第Ⅱ期）にかけて実施した調査結果を報告した（星野,2004;2015）。

前回の調査開始から10年が経過したため、2020年4月から第Ⅲ期の調査を開始した（星野,2021;2022）。

ここでは第Ⅲ期調査の3年目となる2022年4～11月に観察された鳥類を報告する。

2. 調査地の概要

島根県立三瓶自然館は、島根県のほぼ中央にある三瓶山（標高1,126 m）の北麓、標高約550m付近にある。施設は、1991年に開館した本館のほかに、2002年に増築された別館と新館の大きな3つの建物を有しており、山腹に建設された各施設を、長い回廊が山肌を縫うようにつなげている。野外観察コーナーは、本館1・2階の奥まった一角にあり、大きなガラス張りの窓から、奥行き約10m、高さ15mの斜面に設置された水

場を観ることができる（図1）。なお、この水場は一般来館者は立ち入ることができない。



図1 三瓶自然館野外観察コーナーから見る水場

水場周辺の樹種は、クロモジやシデ類のほか、ウリハダカエデやコナラなども見られる。また、斜面上部にはアカマツがまとまって見られる。この樹種は、三瓶自然館が立地する北の原周辺の樹林と同様である（星野,2015）。

野鳥のための水場は、高さ約1m、幅1.5mの石の上に、幅30cm、奥行き60cmのくぼみを作り、人工的な流水を約5ml/sec.で流している。水場のすぐ脇には、野鳥の止まり木となるイヌツゲや枯れ枝などが配置されている（図2）。また、そこから約5～10m下流には、深さ1m程度の溝があり、近年、一部に泥が溜まって水深5～15cm程度となっている部分があり、ここでも少数の水浴びが見られる。

* 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane 694-0003, Japan



図2 野鳥の水浴び場となっている人工的なくぼみ

3. 方 法

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査と同様に4～11月に毎月1回ずつ調査を実施している。調査は、天候や来館者による影響を軽減するため、荒天でない休館日に行なった（8月は開館日に実施した）。調査時間は、9時から19時までを基本とし、日照時間が短くなる9～11月については、水場が暗くなつて目視観察が不可能になる時間までの調査とした。出現種の記録は、野外観察コーナー（館内）からの目視による観察を基本とし、水場に飛来するすべての個体の種類と出現数を記録した。また水浴びは、繰り返し水場に出入りすることも多いことから、周辺から完全に飛去しない場合はカウントをせず、計数が重複しないようにした。

この出現数から、水場を利用する鳥類の優占度を算出したが、ここでの優占度はこれまでの調査に倣い、全出現数に対する各種の出現数の割合をその種の優占度とした。

種名等の表記は、原則として日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会,2012）によるものとした。

4. 結 果

（1）出現種の概要

2022年において記録された出現種数および出現数は2目12科24種、総計874羽となった（表1）。日本野鳥の会島根県支部（1997）による季節区分の内訳によると留鳥14種、夏鳥2種、冬鳥5種、旅鳥3種であった。また、環境省のレッドリスト（2020）、島根県版レッドデータブック（2014）掲載種は出現しなかった。また、これまでの調査では確認されなかったメボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas* と思われる個体が観察された。

本調査地の周辺の自然環境は、落葉広葉樹林に針葉

樹のアカマツが点在する樹林であることから、出現した種のほとんどの種類は、一般的に森林でよく見られる鳥類であり、さらに水場を水浴びや水飲みで利用した種は、全長30cm以下の比較的小型の鳥類であった。

調査期間中の出現種数の変動は図3のようになった。種類数が最も多いのは5月の14種で、ついで6月の11種、であった。また最も少なかったのは9月の3種で、次いで10月5種であった。これまでの調査では春の渡り期にあたる4月が多く、繁殖期の8月で減少し、秋の渡り期である11月にやや増加する傾向があるが（星野,2015），本年はやや異なる傾向であった。

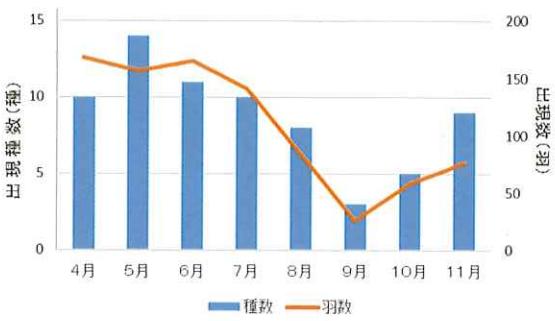


図3 月別の出現種数および出現数

（2）出現数と優占度

水場に出現した全ての出現数について、月別の変化を表すと図3のようになった。出現数が最も多い月は4月の168羽であり、次いで6月の165羽、5月の156羽であった。出現数が最も少ない月は9月の22羽であった。これまでのⅠ・Ⅱ期の調査では、6～8月の繁殖期で最も多い出現数が記録されており（星野,2007;2015），これまでとは異なった傾向であった。

また、出現数をもとに算出した2022年の優占度は表1に示した。また、優占順位の高い順に示すと図4のようになった。出現した全24種のうち優占度5%以上の鳥は6種で、全出現数における割合は82.3%であった。優占度が高かった種は、上から順にヤマガラ *Poecile varius* の27.5%（240羽）、アトリ *Fringilla montifringilla* の17.3%（151羽）、シジュウカラ *Parus minor* の12.2%（107羽）、メジロ *Zosterops japonicus* の11.0%（96羽）が10%以上であり、以下キビタキ *Ficedula narcissina* の8.7%（76羽）、エナガ *Aegithalos caudatus* の5.6%（49羽）が5%以上であった。

これらの優占度が高い6種については、すべて第Ⅱ期水場鳥類調査でも優占度の上位（5%以上）8種（優占度上位からヤマガラ、アトリ、シジュウカラ、エナガ、メジロ、キビタキ、カワラヒワ *Chloris sinica*、ヒヨ

表1 2022年に三瓶自然館の水場で見られた鳥類

目名	科名	和名	学名	区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	総計 (回)
					5日 晴/曇	10日 晴/曇	30日 晴/曇	5日 晴/曇	22日 晴/曇	4日 晴/曇	8日 晴/曇	11月 晴/曇	
キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	留									3
スズメ目	カラス科	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	留	1	1	1	1	1	1	1	1	0.3
	ハシブトガラス		<i>Corvus macrorhynchos</i>	留	4								1
シジュウカラ科	コガラ	<i>Parus montanus</i>	留	10	3	3	3	23	36	19	16	16	1.8
	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	留	6	42	43	39	32	23	19	240	240	27.5
	ヒガラ	<i>Parus atter</i>	留	4	7	7	8	9		3	3	38	4.3
シジユウカラ	シジユウカラ	<i>Parus major</i>	留	2	25	35	25	5	2	4	9	107	12.2
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	留	11	11	5	1					28	3.2
エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	留	5	7	17	18			2	49	49	5.6
ムシクイ科	ムボンムシクイ	<i>Phylloscopus [borealis] superspecies</i>	旅					1		1	1	1	0.1
	ムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	旅		2							2	0.2
メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	留	3	21	27	16	17	12		96	96	11.0
ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	留	2	1				1	1	4	4	0.5
ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	留	1								1	0.1
ヒタチ科	マミチャジナ	<i>Turdus obscurus</i>	旅					14		14	14	14	1.6
ルリビタキ	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	冬					2		2	2	2	0.2
キビタキ		<i>Ficedula narcissina</i>	夏	15	19	25	17				76	76	8.7
オオルリ	オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	夏					1	5	5	6	6	0.7
アトリ科	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	冬	126					25	151	151	17.3	
	カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	留	17	8					25	25	25	2.9
	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	冬	3						3	3	3	0.3
ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioldes</i>	留	2		1			1	4	4	4	0.5
	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	冬	1						1	1	1	0.1
	ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	冬		1	1				2	2	2	0.2
	確認数	168	156	165	141	84	26	58	76	874	100.0		
	種数	10	14	11	10	8	3	5	9	24			

ドリ *Hypsipetes amaurotis*) (星野,2015) に含まれていた。

また、第Ⅱ期で5%以上であったカワラヒワとヒヨドリは出現数がやや減少しており、カワラヒワ2.9%(25羽)、アトリは3.2%(28羽)であった。

以下、優占度の高い6種の本年における出現状況を示す。

①ヤマガラ・シジュウカラ

これら2種は、調査期間中をとおして一定の数が観察される種類である(図5)。最も優占度が高いヤマガラ(27.5%)と優占度第3位のシジュウカラ(12.2%)は、第Ⅱ期の調査でもヤマガラ(18.7%)が優占度第1位、シジュウカラ(12.9%)が第3位で、優占度に変化はあるものの順位は同様であった(星野,2015)。また、過去2年間も順位は同様で優占度もヤマガラは2020年が22.2%、2021年が30.6%、シジュウカラは2020年が12.5%、2021年が15.7%と類似の傾向であった。この2種は、巣箱などを利用して繁殖することが知られており、水場周辺でも巣箱や建物などの人工構造物の隙間を利用した巣作りが確認されている。それ以外の種が、周辺の樹木などに自ら作った巣で繁殖していることと比べると、比較的、水場周辺に営巣可能な環境が安定していると考えられる。

②アトリ

本年の調査では優占度第2位がアトリであった。本

種は冬鳥として島根県全域に渡来て越冬する。水場周辺では春と秋に群れで観察されることがあるが、年によって飛来数が大きく異なり、昨年度は期間中の出現数が7羽、優占度0.8%と数が少なかった(星野,2022)。群れで行動する種類のため、移動時期の4月と11月に月に1回の調査では、飛来数の傾向を確実に把握できていない可能性が高い。また調査の性質上、前年の越冬シーズン～春移動期となる4月と当年シーズンとなる秋移動期の11月のデータを同時に検証することとなるため単純に出現数や優占度の比較をすることは難しい。

③メジロ

本年の調査では優占度第4位がメジロであった。優占順位は昨年と同じだが出現傾向は異なっていた。本年の出現数の推移は、4月から6月にかけて増加し、7月にやや減少したものの、8月は微増し、9月には全く確認されなかった。また、10月になると一定数が観察された。本種のこれまでの月別変化は、多くの年では4月から8月には出現数が多くなるが、9月をすぎると減少し、11月以降は観察されなくなることから、水場周辺では夏鳥的な飛来特性であることを報告してきた(星野,2004;2015)。本年も6月にかけての出現数の増加は過去の状況と類似の傾向が見られたが、7月に減少の時期が早まり、9月にまったく確認されなかつたことは、これまでの出現傾向とは異なっていた(図7)。ただし11月以降は観察されなくなることは、これまでと同様の傾向であった。

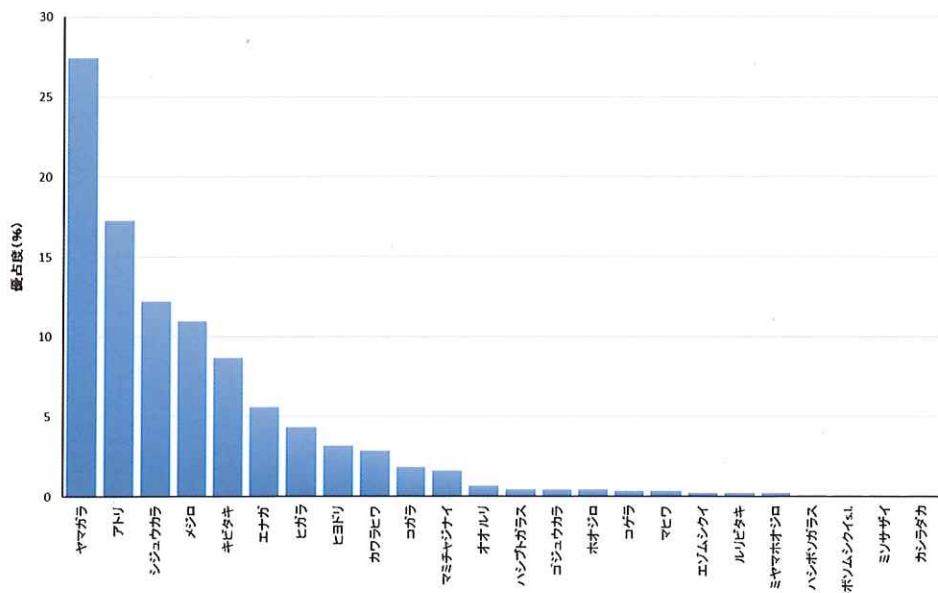


図4 出現種の優占度

④キビタキ

本年の調査では優占度第5位がキビタキであった。本種は、夏鳥として島根県全域に渡来して繁殖する。水場周辺では毎年2~3羽程度の成鳥雄を観察することがあり、2~3個体のさえずりも聞かれる。

出現数の月別変化は、年によって若干の変動はあるものの、7~8月頃に出現数のピークがあり、11月には観察されなくなるのがこれまでの出現傾向である(星野,2015)。

本年は4月にはまったく観察されず、5~6月に増加し、幼鳥が増え7~8月にかけて出現数が増加し、9月には見られなくなった(図8)。過去の調査結果と同様の傾向がみられたものの観察された期間は4ヶ月と短かった。なお4月調査は4月5日であり、夏鳥で

あるキビタキが飛来していなかった可能性が高い。

⑤エナガ

本年の調査では優占度6位で出現数は49羽(5.6%)であった。出現状況は繁殖期から秋にかけて5~7月と11月の2つのピークが見られ、8~9月の3ヶ月間は観察されなかった(図9)。本種は群れで生活することが知られおり、群れの出現は6月頃、夏頃、秋頃の3回となるとされているが(中村,1991)、当地の本年の記録では、5月にはすでに幼鳥の飛来が確認されており、6~7月に幼鳥を中心の群れが飛来した。11月には、ごく少数での出現となっており、年3回のピークは見られなかった。

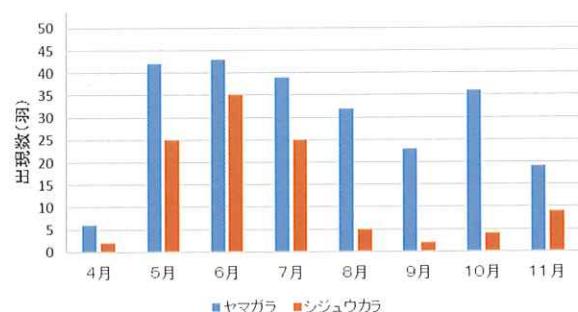


図5 ヤマガラとシジュウカラ

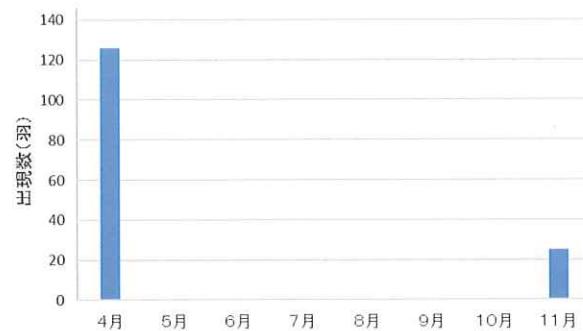


図6 アトリ

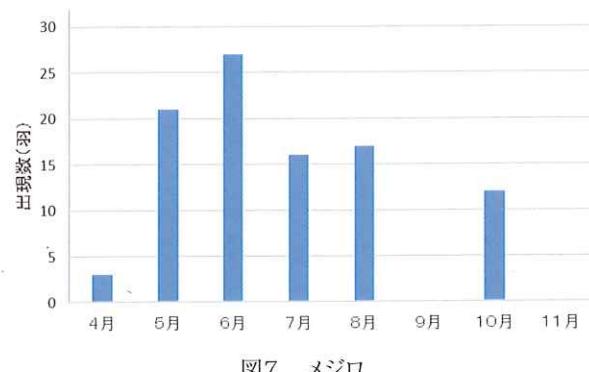


図7 メジロ

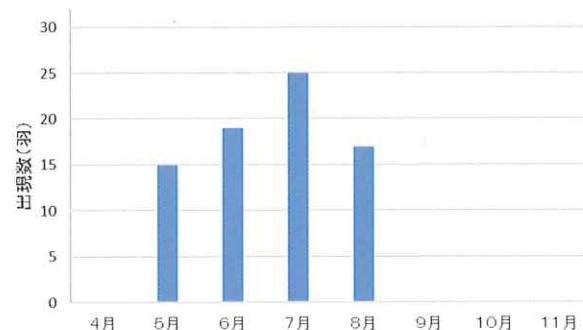


図8 キビタキ

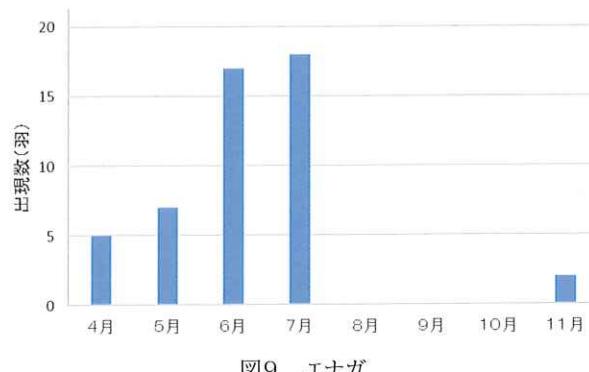


図9 エナガ

(3) 注目すべき種

①メボソムシクイ s.l. (上種)

今回、新たに確認されたものが、メボソムシクイ s.l. (上種) *Phylloscopus [borealis]* superspecies であった。

本種は、日本鳥学会(2012)による日本鳥類目録改訂第7版からメボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas*、オオムシクイ *P. examinandus*、コムシクイ *P. borealis* の3種に分けられた。これまで多くの研究者によって複数の亜種を含む多形種とされてきたが、近年分類が見直され、3つの独立種に分割された。この3種は、DNAの配列と音声形質には明瞭な違いがあるが、形態形質についてはその差異が僅かなため、野外においてはしばしば種の識別が困難な場合が多い(齊藤ら, 2014)。そこで、本種は野外等で識別が困難だった場合には、メボソムシクイ上種と表現されるため、今回もそれに従った。

メボソムシクイは、島根県では海岸近くのヨシ原や松林を渡りの時期に通過する旅鳥とされている(日本野鳥の会島根県支部, 1997)。

今回の確認は10月4日に、1羽が水浴びに飛来した。当該個体は、ごく短時間で飛び去ったため撮影をすることができず種の判定には至らなかった。

これまでの調査等による周辺での確認記録は、モニタリングサイト1000里地・森林調査において2011年の繁殖期に1回のみ確認されている(星野, 2016)が、過去の水場調査では観察されたことはなかった。

②ミソサザイ

本種は、第Ⅱ期に確認されていたものの、今期でははじめて観察された。島根県では、溪流沿いの藪や崖地などでみられるが少ないとされる留鳥で(日本野鳥の会島根県支部, 1997)、三瓶周辺では登山道の標高が700m以上のところでさえずる姿がよく見られる。留鳥と表記されているが、冬期は積雪が多い山地を避けて平野部に移動する漂鳥的な行動をとることでしられている。

今回の確認は、4月5日に1羽が水浴びに飛来した(図10)。これまでの調査等による周辺の記録では、第Ⅱ期水場調査で1羽が移動期(2013年11月)に観察されたことがあった(星野, 2016)。なお、今年度は秋にも調査日以外に三瓶自然館職員による目撃例があった。

③ミヤマホオジロ

本種は、冬鳥として島根県全域に渡来する渡り鳥である。三瓶山では雑木林の林縁付近で冬期に生息していると考えられるが、これまでの調査等による確認記録はモニタリングサイト1000里地調査において

2008年および2009年の越冬期のみであったが(星野, 2016)、2020年より水場でも観察されるようになり(星野, 2021)、本年も繁殖期の6月30日に成鳥のオス1羽が確認された(図11)。



図10 ミソサザイ成鳥個体



図11 ミヤマホオジロ オス成鳥

謝 辞

本報告をまとめるにあたり三瓶自然館のスタッフより水場における鳥類観察の情報提供をいただいた。安食一歩、大隅梨央、岩下幸代各氏には調査に際してご協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

引 用 文 献

- 星野由美子 (2004) 三瓶自然館野外観察コーナーで見られる鳥類
I. 島根県立三瓶自然館研究報告2, 19-30
- 星野由美子 (2015) 三瓶自然館野外観察コーナーで見られる鳥類
(II). 島根県立三瓶自然館研究報告13, 27-35
- 星野由美子 (2016) 2000年から2016年に三瓶山北麓で観察された鳥類. 島根県立三瓶自然館研究報告14, 47-55.
- 星野由美子 (2021) 三瓶自然館野外観察コーナーで見られた鳥類 - 2020年度の調査記録 -, 島根県立三瓶自然館研究報告

19, 65-71.

環境省 (2020) 環境省レッドリスト2020鳥類, 環境省, 東京
中村登流 (1991) エナガの群れ社会, 信濃毎日新聞社, 長野 p.269
日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第7版, 日本鳥学会, 東京,
p.438
日本野鳥の会島根県支部 (1997) 島根県鳥類リスト, しまねの鳥,

日本野鳥の会島根県支部, pp.164-181

齋藤武馬・茂田良光・上田恵介 (2014) メボソムシクイ上種3種
の外部形質を用いた識別 方法, 日本鳥類標識協会誌 26: 45 -
61
島根県 (2014) 改訂しまねレッドデータブック, 島根県, 島根,
p.318